開業奮闘記

File No.03

医療法人福永会
高知ファミリークリニック
（高知県高知市）

高知ファミリークリニック 院長　福永 寿則氏

出産はゴールじゃない！ 赤ちゃんを迎えた新しい“家族”のスタートを支えていく

「こんなクリニックでお産をしてみたい」。高知ファミリークリニック・福永院長の話を聞いた女性の多くが、こう思うかもしれない。出産には陣痛に対する怖れ（おそ）や不安が先立つものだが、福永院長は笑顔で語る。「お産は楽しい気持ちで迎えられるもの」だと。そこで今回は、妊娠中からの丁寧な母親教育をはじめ、母子ともにメリットの多い母乳育児を実践。妊産婦だけでなく、赤ちゃんを中心に家族を丸ごとケアしている同クリニックの奮闘ぶりに迫る。

山間地域の病院で取り組んだ母子支援を市街地でも実践すべく開業を決意

全国的な少子化から、高知県においても出生数は減少傾向にある。出生率でみると2004年と2006年の7.6をピークに年々減少し、全国平均の同8.8と同8.7を下回る。人口の多い高知市では2007年までほぼ9台にあったが、翌2008年は8.5に。年間3,000人台を推移していた出生数も2,000人台に落ち込んだままだ（高知市発表数値）。そうした中、妊産婦の多くが総合病院の産科を受診し、一般開業医では分娩数の減少もみられるという。

2002年から高知市での開業を考えていた産婦人科医の福永寿則氏は、当時市内における出生数と分娩を取り扱う産科病院・診療所の動向を独自にリサーチした。上記のように市全体の出生数は減っているが、「診療所では院長の高齢化によるリタイア廃業のケースが目立つ。特に南西部ではその出産数に比べて分娩を扱う産科施設が少ない」と判断。月30件ベースの分娩数を見込めるとして、市内の朝倉地区に2006年1月、産婦人科の診療所「高知ファミリークリニック」をオープンした。

独立開業に対する思いは、2005年まで10年間勤務した「川村会くぼかわ病院」（四万十町）での診療経験で深まったという。同院は2002年にWHO／ユニセフから四国で初めて「赤ちゃんにやさしい病院」（詳細はコラム参照）に認定されたことで知られる。福永氏は高知県内の大学病院や公立病院の産婦人科に勤務したのち、1995年にくぼかわ病院の産婦人科長として入職、翌年に副院長に就任している。その副院長時代に、一般的な産科ではあまり実践されていなかった母乳育児支援に取り組んだことが「赤ちゃんにやさしい病院」の認定に結びついたのだ。産婦人科医として、かねてから「生まれてくるすべての子どもはもちろん、子どもを迎えた家族も幸せになってほしい」という思いを抱いていた。そうした理想をくぼかわ病院で実現して自信がついたのを機に、県の中心部である高知市でも、支援内容をより充実させた形で独自の産科診療に取り組んでみたいという気持ちが膨らんだのだ。

「高知市の既存産婦人科について分析した結果、開業してもやっていけるとは考えていました。ただ、開業に至るまでの具体的な手順や事業計画、資金繰りなどは、まったくわからない状態で（苦笑）。しかし、50歳で開業するのは少し遅かったくらいですから、『やるなら今しかない！』という思いのほうが強かった。総合メ

ディカルさんに土地の確保などに奔走していただいて助かりました」

コンサルタントを利用して開業したとしても、2年ほどの準備期間が必要になるのが一般的だ。だが同クリニックの場合は、開業までに2年半の時間を要した。最大の理由は土地の確保が困難だったため。12床の入院室をバス・トイレつきの完全個室にする上、母子同床にするためのセミダブルベッドや家族も泊まれるソファベッドも入れるとなると、施設自体がかなり大きくなる。駐車場の整備も考えれば、借りる土地は相当な規模になるため、複数の地主と一件一件交渉していかなければならなかったのだ。

母親と赤ちゃんの絆をつくる ソフロロジー式分娩を導入

開業から5年たった現在の状況は、前年の実績をみると月平均50件、多い月は60件近い分娩を取り扱っている。福永院長が想定した以上の人気ぶりで、待ち時間が長くても通ってくる妊婦が後を絶たない。人気の理由は、ひとえに同クリニックが妊産婦とその家族に"安心感"を与えていることが大きい。福永院長自ら「お産は楽しく、喜びに満ちた気持ちで迎えられる」ものであることを謳(うた)い、母と子の絆の形成を主眼としたソフロロジー式分娩を実践している。ソフロロジーとは、1960年にスペインの精神科医アルフォンソ・カイセド博士が人間の意識の段階を研究することによって提唱した、精神の安定と調和を得るための学問。1972年、これをパリのジャンヌ・クレフ博士が産科に取り入れ、ラマーズ法を超える"やすらかな分娩法"としてヨーロッパに広まっていった。日本にもたらされたのは1987年になってから。熊本大学医学部法医学助教授を退任した松永昭博士が同大学で産婦学を学び、日本ソフロロジー法研究会を設立したのが始まりだ。麻酔で陣痛を抑えるのではなく、痛みへの不安を新しい生命を生み出す喜びのエネルギーに変えていく。妊娠中のイメージトレーニングや分娩時の呼吸法に特徴がある。

「私は出産=ゴールとは考えていません。出産は赤ちゃんの人生の始まりであり、その赤ちゃんが加わった新しい"家族"の始まりだと捉えています。だからこそ母親がお産を「辛(つら)いもの」と思い込まない分娩法が必要で、ソフロロジー法はそれを実現できる方法だった。こうした考えを自分のクリニックで実践してみたかったから、大きな借金を抱えることになっても開業したのです。クリニックを手伝ってくれている看護師の妻は、いまだに借金返済の日々に気持ちが休まらないようですが(苦笑)」

母親になる妊婦への教育だけでなく 父親になる夫へのメンタルケアも行う

高知ファミリークリニックにおいては、妊娠6カ月を目処にソフロロジー分娩法について院長が話をする母親教室を行う。その際には、出産は新しい"家族"をスタートさせる機会であることも教え、母となる妊婦が心からわが子を「かわいい」と思い、出産する日を心待ちにできる心理状態に導いていく。それだけではない。経産婦の場合は上の子どものメンタルケア、初産婦の場合は夫が内に秘める"喪失感"にも目を向ける。

「経産婦の場合は、これまで母親を一人占めできた上のお子さんの『お母さんを奪われた』という気持ちも適切にケアしていかなければなりません。一般的に、長男・長女へのメンタルケアの重要性は知られていますが、忘れられがちなのは夫の気持ちを思いやること。初産時は特に、これまで自分の妻だった女性が母親になっていく様子に気持ちがついていけず、実は大きな喪失感を抱いているものなのです。生まれてくる赤ちゃんを虐待などがない幸せな家族の中で育むためにも、母親の最大の理解者であり、協力者であるべき夫に"父親になる支援"もしてあげます。産婦人科医は本来、母子を中心に家族を丸ごとケアする役目があると、私は思うのです」

こうした院長の方針から、同クリニックでは妊娠中の定期健診における夫同伴の割合が高い。エコー画像を見せるだけでなく、いろいろな説明も夫婦一緒にしている。できるだけ、妻と同じ気持ちで赤ちゃんを迎えられるようにするための工夫だ。そのためか、分娩時の夫やその家族の立ち会いも99%という高割合。帝王切開でもほとんどの夫が立ち会っている。

「立会い出産が多いのは、胎動が感じられるようになったら夫も妻のおなかに手を当て、おなかの中の赤ちゃんと話をするように指導しているためもあるでしょう。夫も妊娠中から父と子の絆を深め、既に新しい家族が始まっているので、赤ちゃんを迎える出産に自然と立ち会うようにな

母親教室でイメージトレーニングなどに用いられる教材

るのです。当院では自然分娩でも帝王切開でも出産の前後の状況を撮影し、退院時に記念のDVDを作成して差し上げています。赤ちゃんの無事な誕生のみを願い、呼吸を整えている母親の安らかな中にも真剣な表情、妻の手を握り自然とその呼吸に同調し、妻と子二人の無事を祈る夫の表情、赤ちゃんが生まれた瞬間押し寄せる安堵と喜びの表情。臍帯(さいたい)でつながったままのわが子を抱いて『かわいい』の連発、『生まれてきてくれてありがとう』の言葉。新しい家族が喜びと満足感の中で始まるのです」

産後の入院期間は育児の実習期間 みな自信に満ちた表情で退院していく

出産後における母子の様子も、同クリニックならではの光景が垣間みられる。通常、産後5日くらいの入院が一般的だが、同クリニックでは4日の入院が主流。早い人では3日で退院していくという。「みな母親として自信に満ちた、美しい笑顔で帰っていかれます」と福永院長は語る。

「妊娠期間がよりよい新生活をスタートするための準備期間であったように、産後の入院生活は育児の実習期間です。当院では母子同室を徹底していますから、母子は24時間一緒。ここで母乳育児の支援もしていきます。『退院したら嫌でも大変な育児が待っているので、せめて入院中は母体をゆっくり休ませてあげたい』という考えもあるでしょう。でも、それは逆効果だと私は思います。24時間の医療支援がある入院中に育児に慣れておかないから、自宅に戻ったとたんに始まる24時間休みなしの育児が大変になりストレスがたまってしまうのです。それに、赤ちゃんもお母さんも楽しい、快適に育児をしていくコツだってある。赤ちゃんの体の欲求に合わせて母親や父親が関わってあげれば、規則正しい生活リズムを自然とつくり出せるし、抱っこの仕方ひとつで泣きやませることもできるんです。当院ではその方法を丁寧に指導しますから、母親は自信をもって家に帰っていけるのだと思いますよ」

もう一点付け加えるとすれば、父親支援もしっかりされていることから、退院後の母親に対する家族のサポート体制ができているということだ。親の育児ストレスは、何らかの悪影響を子どもに与える。それを未然に防ぐことも産婦人科医の仕事である、と福永院長は考えているのである。

母乳育児を推進するのも、母乳を与えることによって赤ちゃんに免疫をつけ、栄養状態をよくする以上の意味があるという。

「近年、大きな社会問題となっている少年犯罪や児童虐待を論ずるまでもなく、子どもが育つ環境は極めて重要です。子どもの心の豊かな成長のためには、出生直後からの母子の愛情あふれる交流や家族の絆があるか否かがポイント。厚生労働省などの調査では、児童虐待は母乳育児群より人工栄養群の母子に多いと報告されているほどです。私は『高知母乳の会』会長も務めていますが、母乳育児を推進する理由として5つの観点を挙げています。①母乳に含まれる栄養や免疫成分のほか、母親から受け取る常在細菌叢などの働きによって強い子を育てる。②母と子の絆を通して人間愛を教え、やさしい子を育てる。③母乳には脳と神経系の発達を助ける成分が多く含まれることなどから、頭のよい子を育てる。④母親に対する心身脳作用として、母親を育児指向型にする。⑤そして、なにより“哺乳動物”としての掟。つまり、母乳での授乳行為は自然なものであり、豊かな母子相互作用を可能にする。母子双方にとって大きな意義があるといえるでしょう」

ただし、母乳分泌量が十分でなかったり、病気や仕事の都合で人工乳に頼らざるを得ない母親も多い現代。そうした母親たちへの配慮と育児支援も決して忘れてはならない。「母乳育児推進の目指すところは、母と子の幸せであり、単に母乳率を上げることではない」と福永院長は注意を促す。

職員一人ひとりの意識を高めるため 「赤ちゃんにやさしい病院」認定にこだわる

こうした数々の取り組みにより、地域で評判の産婦人科クリニックとして知られるようになった分、これからは健診などの効率化を図ることのが優先課題となってきている。現在、同クリニックに勤務する助産師は常勤6人、パート1人の計7人。決して少ない数ではないが、今年はもう1人くらい増やして、助産師指導の充実

を図りたいと考えている。

「院長である私に診てもらいたくて来院する妊婦がほとんどですから、基本的に“助産師外来”を設ける考えはありません。とはいえ、外来の待ち時間が2時間以上になるときも多い現状は改善していかなければなりません。医師を増やすことは難しいので助産師の数を増やし、私と彼女らの役割分担を明確にして、健診や相談業務の質を保ちつつ効率化を図っていくつもりです。業務効率化の一環として、昨年12月に電子カルテも導入しました。運用しはじめて数カ月ですので、職員らもまだ使い慣れていませんが、早くスムーズな流れをつくりたい」

また、院長による母親教室は妊娠21週前後で1回行っているが、今後は32週目くらいにもう1回開き、母乳育児についてより詳しく指導したいという。

「母乳育児を推進する病院に対して、ユニセフは『赤ちゃんにやさしい病院』の認定を行っていますが、当院でも今年中に認定申請を提出したいと考えています。これは申請すればすぐに認定されるものではなく、厳しい審査が入って再申請といった事態になることも考えると、認定までに3年くらいの期間が必要になるかもしれません。そこまでして認定を取ろうと思う理由は、今後の経営にメリットがあるからというよりは、『赤ちゃんにやさしい病院』という看板を背負うことで、職員一人ひとりの意識がさらに高まることを期待しているからです」

開業当初に採用した職員の中には、単なる“就職先”として働く人もいた。しかし、福永院長が求める人材は「よいお産ができるクリニックづくりに、熱意をもって関わってくれる専門職」である。開業から5年の間に職員が入れ替わってきた背景には、こうした院長の方針や業務の多忙さについていけない職員が少なからずいたこともあるだろう。

「開業するにあたって最も大事なのは、院長が自分のクリニックで何がしたいのか、ということ。私の場合は『新しい家族生活を幸せにスタートしてもらえるよう、よいお産ができる環境づくりに力を注ぐ』こと。そうしたビジョンを明確にしていないと、職員ともいいパートナーシップは築いていけないでしょうね。職員教育は簡単にできるものではありませんが、今後は院内研修も充実させていきたい」

来院する妊産婦だけでなく、彼女らを支援する職員らにとっても幸福度が高く、自己実現できる場をつくりたい。さらには同クリニックが掲げる理念と活動姿勢が地域に浸透し、地域の家族関係の深まりにまで寄与できるようにすることが、福永院長の目指すクリニックの姿なのだ。

医療法人福永会 高知ファミリークリニック

診療科目：産科、婦人科
院　　長：福永 寿則
所 在 地：高知県高知市朝倉横町23-7-10　〒780-8074
T E L：088-844-3339
F A X：088-844-3338
U R L：http://www.kochi-family.jp/

Column コラム 「赤ちゃんにやさしい病院」とは

1989年3月、WHO／ユニセフは「母乳育児の保護、促進、そして支援」するために、産科施設は特別な役割をもっているという共同声明を発表。そして、世界のすべての国の産科施設に対して、母乳育児を中心とした適切な新生児ケアを推進するため「母乳育児を成功させるための10カ条」を守ることを呼びかけた。以来、10カ条を長期にわたって遵守し、実践している施設を「赤ちゃんにやさしい病院（Baby Friendly Hospital:BFH）」に認定している。現在、134カ国15,000の産科施設がBFHに認定され、日本では61施設ある（2009年8月現在）。

●母乳育児を成功させるための10カ条

①母乳育児の方針をすべての医療に関わっている人に、常に知らせること
②すべての医療従事者に母乳育児をするために必要な知識と技術を教えること
③妊娠した女性すべてに母乳育児の利点とその方法に関する情報を提供すること
④分娩後30分以内に母乳を飲ませられるように援助すること
⑤母親に母乳育児の方法を教え、もし赤ちゃんから離れることがあっても母乳の分泌を維持する方法を教えること
⑥医学的に必要がないのに母乳以外の水分、糖水、人工栄養を与えないこと
⑦母親と赤ちゃんが24時間、一緒にいられるように母子同室にすること
⑧赤ちゃんが欲しがるときに欲しがるまま授乳を勧めること
⑨母乳を飲んでいる赤ちゃんにゴムの乳首やおしゃぶりを与えないこと
⑩母乳育児のための支援グループ作りを援助し、退院する母親に紹介をすること